

国際関係学から遠く離れて

大野 光明

私が立命館大学国際関係学部に入学したのは、1997年4月のことである。当時のキャンパスは「パルテノン」と呼ばれた西園寺記念館。4回生の後期に、現在の国際関係学部のある恒心館に移った。入学当時の国際関係学部は他学部と離れていたこともあり、どこか独特で独立した雰囲気があった。同級生にも先輩にも強烈な個性をもつ学生がたくさん集まっていた。

終えたばかりの高校生活と比べ、何もかもを自分で選んでいけるという自由と、国際関係学という初めて触れる学問、そして友人や知人、教員との新しい出会いに日々興奮し、解放感を得ていた。と同時に、それまでであった与えられたレールの上を歩いていく（歩かされていく）日常とは異なり、自分で物事を決めていくことへの漠然とした不安を感じていた。

私は立命館高校——当時は深草に校舎があった——からの進学者だった。高校ではサッカー漬けの3年間を送った。大学の体育会サッカー部にわずかな期間参加したが、自分にはついていけないと断念する。これまですべてを打ち込んできたサッカーから離れたことで、自分のなかにぽっかりと大きな穴があいていた。それは大きな不安と欠落感につながっていただろう。解放感と自由、そして不安が混ざり合った揺れを18歳から19歳の私は生きていたのである。

なぜ国際関係学部を選んだのだろう。いま思い出せるのは、国連職員のように国際社会を舞台に生きてみたい、働いてみたいという憧れがあったことだ。その一つのきっかけに、高校在学中、学内で行われた中田武仁さんの講演会がある。中田武仁さんの息子・厚仁さんは、カンボジアでの1993年の総選挙で国連ボランティアの選挙監視員として活動、その最中に殺害された。武仁さんの講演は、厚仁さんのライフヒストリーについてであった。講演を通じて、私は「平和をつくる」という生き方や働き方があるのだと知る。世界には戦争や核兵器、貧困や飢餓などの問題がいくらかでもある。そういった理不尽な問題に正面から取り組む生き方が存在するという。なんとすばらしいことかと思った。10代後半に芽吹いたこの思いは、国際関係学部への進学へとつながっていったと思う。国際社会のなかのさまざまな権力関係や、国際公務員の特権性やエリート性、権力のようなものへの自覚や感性はまったくない。だが、言葉をかえれば、国益を追求するような生き方や、会社の利益を追求し、朝から深夜まで毎日働きつづけるサラリーマンのような働き方はしたくないという漠然とした感性のあらわれでも

あったと思う（小学校5年の終わりに、慣れ親しんだ東京から大阪への転居を強いた父親の働き方への反発もあったかもしれない）。

* * *

私の国際社会への憧れを良い意味で揺さぶってくれたのは、国際関係学部での経験だった。当時の国際関係学部には、国際社会なるものを批判的にとらえるユニークな教員が集まっていた。たとえば、関寛治さん（講義を受けたことはなかったが、グローバル・シミュレーション・ゲーミングの場でお会いすることがあった）、小林誠さん、南野泰義さん、西川長夫さん、文京洙さん。おそらく非常勤講師として、注目されたばかりのカルチュラル・スタディーズについての講義をしていた水嶋一憲さん。客員教員として授業をもっていたヨハン・ガルトウングさんやニコラス・オナッフさん。これらの方々の授業を受け、交流するなかで感じとったのは、次のようなものだ。——これまで国際関係学は国家と国家の関係を前提としてつくられてきた。しかし、冷戦が崩壊し、急速なグローバリゼーションが進行する現在にあって、国民国家と国家間関係の限界と暴力は顕在化している。だから、国家間関係を支える知＝権力としての国際関係学自体を批判的にとらえ、再構築しなければならない。そのプロセスに私たちは参加しているのだ。——そのような緩やかに共有された認識と文化が、当時の国際関係学部にはあったと思う。

学部生時代に最も影響を受けた本は、西川長夫さんの『国民国家論の射程——あるいは〈国民〉という怪物について』（柏書房、1998年）である。いまもときどき読み返す。私の人生を変えた本だ。次の文章は、戦後50年をめぐって書かれた文章である。

私も日本が行ったのは侵略戦争だと思い自分の負うべき責任を考える。だがどのような反省や行為をしようと、それは「日本国民としての誇り」や「矜持」をとりもどすためでは断じてない。むしろ、自己を日本や日本国民と同一化して何ごとかを語りあるいは行うことだけは止めようというのが、私が戦争から学び、戦後文学を読みながら育ててきた考えであった。

国家があれば戦争をやる。戦争には勝敗がつきものだ。だが良い戦争なんてありうるだろうか。正義の戦争と見えたものはいつか侵略戦争に転化する、というのがこの二〇〇年あるいは五〇年の国民国家の歴史だろう。戦争はいつも国民を巻きこむ。国民はつねに加害者であり被害者だ。戦争責任を負うというのは究極的には、そのような国家を支える国民をやめるとのことだろう。「汚れ」は敗戦にあるのではなく、そのような国家と国民の存在自体にあるのではないか。（西川長夫、1998、『国民国家論の射程』12-13頁）

戦争をくりかえさず、平和をつくるということ。そのためには平和的な国家をつくり、平和的な国民になることが必要だと認識はこの社会の前提となっている。だが、西川さんはそれは誤りだと明確に述べた。どんな国民国家でも国益を追求し、国民の自己同一性と他者との差異を生み出す。そして、それらは戦争をつくりだすのだと。だから、国民国家という前提自体を壊し、乗り越えることが必要だという。この本は国際関係学や比較文化論などの既存の学問を問うだけでなく、私たち一人一人の生き方を問うものだ。次のような一節には線が引かれている（学部生時代に引いたのだろうか）。

私が意図し理解する限りでの国民国家論は、単に国民国家の仕組みや機能を明らかにしてその歴史的変化をたどるだけでなく、それをいかに乗り越えるかという問いを含むものである。国民国家はその構造と本質からして、その中に生きる住民（国民）には全貌が見えにくく、その本質はつねに隠蔽されている。国民国家を論じることは、そのような国家を相対化し対象化する視点を求める作業を伴う。またそのためには、すでにつねに国民化されている自分自身を相対化し、国民としての自己を解体＝再構築するための作業を必要とする。この点で私の言う国民国家論は、既成の社会科学の中に位置づけられた国家論とは異なっており、社会科学に対する批判の観点を含むことになるだろう。（西川、前掲書、288頁）

国家を相対化し、国民としての自己を解体＝再構築すること。この本を読んだとき、目の前の世界がぐらぐらと揺らいでいった。国境線の引かれた世界地図に、毎日目にする天気予報の日本地図に、あるいはサッカー日本代表を応援していた自分自身に対して、じわじわと違和感が広がっていく。その違和感は新しい世界への扉なのだと予感する。わくわくしてきた。

そして、私は沖縄の基地問題への関心を増していった。中学生の修学旅行の行き先は沖縄島（沖縄本島）だった。沖縄戦の生々しい傷跡の残る戦跡を巡り、いまだに広大に広がる軍事基地を目の当たりにした。沖縄の音楽や焼き物などの文化に触れ、京都とは異なる気候と自然に魅了された。修学旅行後の1995年、米兵による小学生少女レイプ事件が起こった。基地の縮小・撤去を求める声と運動が強くなっていく。普天間基地の「移設」が日米両政府間で合意されるも、沖縄県内に新たな基地をつくるのが条件となった。自分がどこまでその政治的な動きを追っていたのかはよく覚えていない。けれども、世界各地の戦争や貧困だけでなく、日本国内の沖縄にも、とても大きく深刻な暴力が存在していることに気づくこととなった。

大学入学後も沖縄への関心はつづいていた。たとえば、グローバル・シミュレーション・ゲーミングでは、沖縄県知事役を選んだ。友人の橋口昌治がアメリカ大統領役だった。彼に基地撤去を要求すると「それは国内問題だから日本政府に言ってくれ」と偉そうに言われ、門前払い

された（大統領役としては模範的な回答だ）。アメリカからすれば国内問題。日本政府に訴えれば国際関係の問題。国家間関係を前提におくと、沖縄の声はどこからも聞き取られない。行き場がない。国家安全保障や国益という枠組みを越えていくことが必要だ。西川さんの言うとおりである。

* * *

1999年、3回生の夏。私はアメリカ・ワシントンDCにあるアメリカン大学での交換留学に出発した。約10ヶ月間の留学中、さまざまなことがあったが、社会運動という世界に触れることができたのは転機だったように思う。

1999年11月から12月、アメリカ西海岸のシアトルで、大規模な闘争が展開された。反グローバルイゼーション運動の幕開けをつげる出来事の一つとしてのちに記憶されることになる、WTO総会に対する巨大な抗議行動であった。その様子を、私は学生寮センテニアル・ホールの共有スペースに置かれたテレビのニュース映像で見た。抗議する人びとと警察、機動隊との市街戦のような衝突の映像がくりかえし流されていた。受講していた授業はシアトルの話でもちきりだった。教員たちもどこか興奮していた。2000年4月にはワシントンDCでIMFの年次総会が開かれ、それに対しても大規模なデモが計画されているという。この大学にもたくさん人の抗議活動参加者が集まり、学生寮にも泊まるようだといった情報も流れた。

私はデモや社会運動に参加した経験はなかった。けれども、この動きに素朴に興味をもった。それほどシアトルのインパクトは大きく、騒然とした学内の雰囲気もデモへの参加を促したと思う。立命館大学の産業社会学部からデュアルディグリー・プログラムに参加し、留学していた友人にMがいた。彼から誘われたのかもしれない。Mはジャーナリストを目指す、熱く、行動力のある、そして知性的な学生だった。知り合うと、共に酒を飲み、ギターで歌い、さまざまなことを語り合うかけがえのない友人になった。彼が「身分証明になるようなものはすべて持たずにデモに行くんだ」と言い、そういうことが必要なんだと思った記憶がある。もし逮捕・拘束され身元がばれれば、留学ビザを取り消され、場合によっては強制的に日本に送還されるかもしれない、それは避けよう——そういう冷静な判断と知識をもちあわせていたのがMだった。

デモ当日、ワシントンDC中心部の総会会場周辺の数ブロックは封鎖され、多数の警官が配置され、阻止線がはられた。それに対峙するデモは巨大だった。だが、シアトルのニュース映像で見たような衝突を私は目にしなかった。機動隊員と向かい合って立ち、歌い、花を差し出し、話しかける参加者を目にした。デモ全体の雰囲気も、カラフルなプラカードやパペット、音楽など、どこかフェスティバルのような明るさである。しかし衝突はあったのだ。友人のMはその最前線取材しカメラで撮影しながら、参加者とともに／として阻止線を越え逮捕

されたようだった。2日ほどして出てきたMは元気そうで、自分の経験した出来事を楽しそうに語ってくれた。自分の身元を知られることなく出ることができたという。私があるようなリスクのある場に身を置かなかっただけだったことを、彼の話から理解できた。世界にはこれほどまで巨大な運動が起きている。そして、国際機関や国家、資本に対して、自由に、そして力強く、しなやかに抗議の意思を示す人たちがいる。同じ頃、インターンシップをしていたアムネスティ・インターナショナル・USAでも同じことを感じていた。これらの経験を通じて、世界を揺り動かし変えていく、無数の人びとの存在と力に触れたのだ。

留学から戻ったのは2000年5月、4回生の春である。大学院に進学し研究をしたい、何かを書いて表現していきたいという強い思いを抱えながらも、このまま親のすねをかじりつづけてはいけないのだろうなという気持ちもあり、だいぶ遅れての就職活動を済ませてスタートした。その結果、国際協力系の財団法人に就職が内定した。卒業論文では、沖縄の基地問題をテーマに選んだ。沖縄における基地問題をめぐってどのような言説があるのかを整理しながら、国際関係学と国家安全保障を乗り越える認識枠組みが必要だという論旨だったと思う。この問題意識は2005年に大学院に入ってからでも持続することとなった。

* * *

2001年春、東京で仕事を始めた。東京の空はほんとうに小さかった。鴨川が懐かしい。無表情に、直線的に、新宿地下道を兵士のように行進していく「サラリーマン」たちに吐き気がした。満員電車で朝から疲れた。一ヶ月定期しか買わなかった。いつでも辞めてやるという「初心」を確認しつづけていたのかもしれない。

その年の9月11日、ニューヨークとペンタゴンでの同時多発テロが起きる。明日も仕事だ、はやめに寝ようと、下町・十条にあった5畳ほどのワンルームのアパートの部屋で布団に入り、なんとなく気になりテレビをつけると、ワールドトレードセンタービルに飛行機が激突する映像が流れている。映画のようだが、ニュースなのだ。

とてつもないことが起きている。この日以降、めまぐるしく変化する世界情勢から目が離せなくなった。アメリカ社会は自らが世界の中心であることをあからさまに宣言し、二元論的な世界認識（善と悪、正義と野蛮、西洋とイスラーム、民主主義とテロリズムなど）を生産・流通させていく。国民国家は解体されるどころかよりいっそう強化されている。テレビのニュース、新聞の記事、政治家や知識人の発言、それら一つ一つに苛立った。なぜこうも易々とアメリカに同一化し、善・正義・西洋・民主主義の側に立ててしまうのか。そのようなふるまいは、アメリカの軍事主義と沖縄での数々の暴力、それらに加担している日本社会の姿を忘却し隠蔽することではないのか。9・11以降、軍事警戒度を上げた沖縄の米軍基地では、兵士の銃口が

住民に対し向けられていた。アフガニスタンへの侵攻やイラク戦争では、在沖縄米軍基地の部隊が参加し、多くの市民が殺害されている。日本政府はアメリカの政策と戦争を支持した。これに対して、世界各地で大規模な反戦デモが次々に行われていく。私がアメリカで経験したあのデモの風景が、世界各地、日本各地に次々に生まれていったのである。時を同じくして、辺野古では米軍基地建設のためのボーリング調査が強行され、沖縄内外から集まる市民による座り込みと阻止行動も始まった。私も、仕事のない週末を中心に、東京での反戦デモや沖縄関連の集会に積極的に参加するようになっていた。

少しずつ世界が、歴史が、そして人びとが動いている。自分もその動きのなかの一つになりたい。そう思うようになっていた。Mといっしょに「名もなき風景の中で」というメールマガジンを始めたのもこの頃だ。下北沢の「いーはとーぼ」という喫茶店で、Mと打ち合わせをした夜のことを鮮明に思い出す。文章を書き、発信すること、それを共同作業で行うことの意味と魅力、難しさを経験した日々だった。

そして、社会運動のなかへと自分の身は置かれるようになっていく。国際公務員や外交官、そしてグローバル・エリートたちの国際社会からは遠く離れたところへと歩みだしていた。暴力と抑圧があふれ、その強度が増していく時代にあって、それは必然であったと思う。

* * *

現在、私は社会運動史・社会運動論を専門とする研究者として生きている。また、沖縄や京都府京丹後市丹後町宇川の米軍基地・自衛隊基地をめぐる問題に関する社会運動にも参加している。国家という巨大な政治的装置と、そのもとでつくられてきた軍隊と怪物としての国民——それらからの自由と解放を想像／創造してきた人びとの歴史を学び、考察し、現在に結びつけていく作業をつづけている。私はこのような仕事を通じて、国際関係学（部）をとらえかえし、そのイデオロギーと格闘しつづけているのかもしれない。

この文章で記したのは、今の私に至る過程の断片であり、その背景にある大きな歴史の流れである。国際関係学部入学前後から、9・11同時多発テロ、そしてイラク戦争と反戦デモ、辺野古新基地建設工事に対する座り込みという歴史のなかで、自分は変わっていった。自らが働き、暮らし、生きる現場は形をあらわしていった。現場とは自分の意思でつくりだすものではないようだ。それは、さまざまな出来事や幸運な出会いにぶつかりながら、他者によって促されるなかで到来し生成するものなのだと思う。

この文章に登場した人たち、登場しなかったがお世話になった多くの人たちに心からの感謝の気持ちを伝えたい。多くの顔が浮かぶ。そして、いまはなき M にこの文章を捧げたい。

(大野 光明, 滋賀県立大学人間文化学部准教授)